

平成十年十二月十三日 和敬塾予餞会記念講演

「日本の耐用年数」

日本銀行副総裁 藤原作弥先生

只今ご紹介いただきました藤原です。よろしくお願いいたします。

本日の和敬塾卒業式、まことにおめでとございます。かねがね和敬塾のことは伺っておりました。皆さんの先輩方が、そして今回卒業する皆さんも、ここでの体験を一つの財産として、社会全般で活躍していらつしやるということとは大変すばらしいことです。

今回の講演に際し、過去に各界の錚々たる方々が記念講演をなさっているということを知りまして、一旦お断りしようかと思いましたが、私は現在、日本銀行で副総裁を務めておりますけれども、今年（平成十年）三月に就任したばかりでして、長い金融政策の経験があるわけではありません。その前には三十数年間にわたって新聞記者をしておりました。新聞記者という商売は、物事を広く浅く見る仕事ではありませんが、何かスペシャリティーといったものを身に付けているわけではありません。

ですから自分が専門家であるような顔をし

て、過去の学者や先輩が述べてきたことを知ったかぶりしてお話するよりは、自分で理解していること、自分の体験に基づくことを中心にお話するのが正直ではないかと思っておりました。それが直接皆さんの参考にならないかもしれませんが、何かの機会のあるときに「あの人は、ああいうことを言っていたなあ」というような具合に思い出して、将来少しでも皆さんのお役に立てればいいと思っております。

新聞記者時代、私は二足のわらじを履いていました。新聞記者の一方で、ノンフィクションライターといえますか、エッセイストといえますか、そういった仕事をしていました。新聞記者自体も私は好きでなかった商売ではありませんが、ならざるを得なかったという部分もありました。そのため、新聞の仕事では経済分野を専門にしましたが、もう一足のわらじでは、経済に限らず自分の好きなテーマを自由に書

き、エンジョイしてきました。

もしかしたら皆さんは今激動している日本の金融情勢についての話を聞きたい、と思っっているかもしれませんが、本日は演題に「日本の耐用年数」などという大きなタイトルを付けさせていただきました。

この図表をご覧くださいませ（8頁参照）。これが私が今回のお話でタイトルを付けさせていた元になる私なりの考え方です。

これは、私が約六十年間にわたる人生の中で経験し、そこから考えた結果到達した一つの近代国家としての日本の来し方行く末の分析であり、イメージです。その理由は後から申し上げます。それまでに私の歩んできた道を、駆け足で説明させていただきたいと思えます。

私は昭和十二年、東北の仙台で生まれました。昭和十二年という年は北京の郊外で盧溝橋事件という事件が起こった年、その前年には日本で二・二六事件が起こった年、そういう時期で

す。私は生まれてから東北の盛岡、秋田と転々した末、日本海を越えて朝鮮半島に渡りました。今では北朝鮮になっていますが、ある港町に一家は渡りました。それから数年して、今度は中國大陸の奥地にまで行きました。

そして昭和二十年日本が戦争に負けて、私たちは中国の奥地、かつての満州国で敗戦を迎えるはずでした。しかし敗戦前にソ連の戦車軍団が国境を越えて攻め入ってきましたので、日本に帰るため中國大陸を南へ南へと避難したのですが、国境の街に着いたときにはもうソ連の軍団によって支配されていました。その国境を越えて朝鮮半島に渡り、そこから日本に帰ってくるという希望は断たれ、昭和二十年の八月から翌昭和二十一年の十月まで、敗戦国民として一年数カ月の間、難民生活を余儀なくされました。それが私の中国体験といえますか、満州体験です。

私は仙台で生まれて、盛岡に行つて、秋田に行つて、朝鮮半島に行つて、そして中国東北地方の三つの省に日本が建設した傀儡国家、つまり満州国に行きました。

私が住んでいたのはモンゴルとの国境近くの街——興安街でした。満州国の首都は新京といひ今は長春という名前です。日露戦争のときにソ連から権益として継承した大連という大

きな港町があり、同じく南満州鉄道、いわゆる「満鉄」という鉄道がありました。

敗戦の時、私はソ連の戦車軍団に追われて、逃げて逃げて、安東という街に到達したのですが、ここに鴨緑江という東洋一の川が流れています。この川が国境をなしているのですが、その鉄橋を越すことができないまま、この街で一年数カ月の難民生活を余儀なくされました。

私が当初住んでいた興安街は、今でも中国・内モンゴル自治区の中の大きな拠点です。昭和十四年にノモンハン事件という、日本の関東軍とソ連・モンゴル軍の武力衝突事件が起こりました。関東軍とは当時満州に駐留していた日本の陸軍部隊です。その頃モンゴルはソ連に次いで世界で二番目の共産国家であり、ソ連とモンゴルが一体をなして、日本の支配下の満州と対峙しており国境侵犯の争いからこの事件が勃発しました。

実はこのノモンハン事件で日本は徹底的にソ連およびモンゴル軍の合同戦車軍団に撃破され、大敗しました。しかし当時の関東軍および日本の陸軍の本部は、平和協定を結んだ後、何もなかったように口をぬぐつて、日本国内にも世界にもひた隠しにしていたということが、戦後明らかになりました。この大敗の恥辱を明らかにしていたら、その後のような過ちは繰り返されずに済んだかもしれません。

なぜ、こんなところまで私たち一家が行ったのかといひますと、父は言語学者で日本語が属しているウラル・アルタイ語族という言葉に関心を持っていました。

その中でもシャーマニズムの言葉にとりわけ関心を持っていました。「シャーマン」とは予言、託宣、占い、病氣治療、祭儀などを行う人物で、巫女であったり神のしもべといわれたりします。彼らが占いをするときや、お経、呪文を唱えるときには、本来の自分の人格をなくして、神のお告げを伝えたり、死んだ人の言葉をその人になり代わってしゃべるといふことから、特別な言葉を使うといふふうにいわれています。シャーマンはウラル・アルタイ語族系の民族に共通した職業であり、彼らが扱う言葉を比較しながら分析する、というのが父の研究テーマでした。

ウラル・アルタイ語族の中でも、とりわけアルタイ語にはどういふ言語があるか具体的に申しますと、日本語、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語などです。私の父は東北地方で仙台と盛岡と秋田を中心としながら、特にシャーマニズムが多く受け継がれている東北地方をフィールドワークしました。

父は、戦前、旧制中学で国語の教師をしていました。大学で言語学を修め、今でいえば高等

学校の国語教師をしていました。国語を教えながら、そのかたわらシャーマニズムの言葉について研究をしました。例えば、青森県に行つて恐山の巫女から話を聞き、録音機器もありませんでしたから、一生懸命紙にしたためた。山形県の出羽三山の山伏に会つて、山伏がどういふ呪文を唱えたか、それも紙に書き残したわけです。大体日本語の研究が終わりますと、さて次は朝鮮語だということで朝鮮半島に渡りました。

その後、朝鮮で同じようなフィールドワークが一応終わりますと、今度はモンゴル語との比較研究だということで満州まで出かけたのです。満州というのは中国の一部ですから中国語が主に話される言語ですけれども、このへんは民族的に言えば、女真族が大部分で、地域によつてモンゴル人が多い地域もあります。したがつて父が奉職した学校は専らモンゴル人の住む地域でした。

そもそも満州という国は、「五族協和」といつて日本人、漢民族、満州民族、朝鮮民族、モンゴル族の五つの民族が一緒になつて一つの国をつくり、王道築土を建設しようというスローガンのもとに建設されました。しかしその背景には、日本が世界に伍して伸びていくためには資源がないので、日露戦争でロシアに勝つた賠償である経済権益を継承して進出した土地

に、自分たちがリーダーになつて新しい国を作り、それを世界に進出する橋頭堡にするという狙いがあったことは想像にかたくありません。

私の住んでいた場所は、今はウランホト(烏蘭浩特)といいますが、そのころは興安街という名前と呼ばれていました。興安街というのは、この付近の興安嶺という大山脈から取られた名前です。ここの陸軍士官学校、つまり軍隊の幹部を養成する学校で父はモンゴル人の幹部候補生に日本語を教えていました。日本語を教えるかたわらモンゴル語のシャーマンの言葉を研究していたのです。

もし日本が昭和二十年に戦争に敗れないで、その後、父が仕事を求めるとすれば、今度は同じアルタイ語族系でも日本語、朝鮮語、満州語の研究が終わつたということで、今度はトルコ語あたりでも研究すべく、自分で志願して行つて職を求めたに違いありません。

自分の研究をするためにある場所に赴き、一通り研究が終わると次にどこに行こうかと狙いをつける。その場所に学校の先生の職があるかないかを探し、あれば志願してそこに行き、半年ぐらい住んでみる。家族を呼び寄せても大丈夫だという見当がつくと私たちを呼び寄せて、その土地で大体一年ぐらい研究生活を続ける。一段落すると、また次はどこに行こうかなという狙いをつけ、そこに教職の仕事がある

と手を挙げて、半年ぐらい調べて、家族を呼び寄せる、というふうな具合に父は転々と移動していたわけです。

昭和二十年八月九日に、ソ連軍が日ソ中立条約を一方的に破棄して国境を越えて攻めてきました。もう日本は太平洋戦線では英米、オランダとの戦いに敗れて、沖繩、本土にも飛行機が飛来して日本の敗色はほぼ決定的になっていました。そしてご承知の通り、八月九日には長崎に原子爆弾が投下されたのですけれども、ソ連はそのタイミングを測るかのように、八月九日に一斉に国境を越えてきました。

最近ソ連が崩壊してわかつたことなんですけれども、約一年前から日本が支配している満州国に攻め入ろうと計画しており、国境にはソ連軍およびモンゴル軍が集結して、今や遅しと待ち構えていたわけです。ところが悲しいかな、当時日本は太平洋の戦線に大半の勢力を割いて、この地域の国境の守りが薄くなつていました。しかも、情報活動が徹底していなかったせいでしょうが、ソ連が攻めてくるはずはないと高を括っていた。それでも昭和二十年の六、七月に入ると情勢が不穏になってきたので、九月ごろにはもしかしたらソ連も参戦するかもしれないぞと備えを固めはじめたのですが、九月どころか八月早々にソ連軍は攻め入つてきたとい

うわけです。

昭和二十年当時、私は興安街（ウランホト）という町の国民学校（小学校）の三年生でした。たまたま父が士官学校の教授をしていたものですから、情報を察知して八月十日午後五時過ぎの最後の貨物列車に私たち一家は飛び乗り、現地を脱出できました。父が奉職していた陸軍士官学校の家族避難団百五十名が結成され、そこから国境の安東という街、今は中国名で丹東という街まで逃げ延びてきたわけです。この途中、首都の新京や奉天という街でソ連軍機の機銃掃射を受けて駅の前の防空壕に入ったり、列車の下の椅子に身をひそめながらようやく逃げたわけです。安東に着いたときにはもう八月十三日の夜になっていました。先ほど言いましたように、そこも既にソ連軍の手に落ちて、国境を越えて朝鮮半島に逃げることができなかつたので、その街で難民生活を送ることになりました。

私たちは幸いにも、昭和二十一年の秋に無事日本に一家五人で引き揚げてくることができました。それから小学校、中学校、高校というふうに普通の日本人と同じような生活をし、大学に入り、卒業して新聞記者になったわけです。その後、日本と中国が国交を正常化し、当時通産大臣であった故安倍晋太郎氏が国交正常

化十周年記念式典のため訪中されたときに、随行記者として中国に行ったのが、満州から引き揚げてきて以来の私の初めての中国訪問です。それから毎年のように中国に行きました。新聞記者として日中の特に経済関係を取材するうちに、ジャーナリストとしてなぜ日本と中国は戦争をしたんだろるかということに関心が出てまいりました。それには、まず自分と家族がどういふ中国体験をしたかを書き残しておこう。それも新聞記者の務めのひとつではないかということ、何度も訪中して本を何冊か書いたわけですが。

作家としては『聖母病院の友人たち』（新潮社、のち現代教養文庫）がデビュー作ですが、満州・中国関連の本の第一作は『満州・少国民の戦記』（現代教養文庫 社会思想社）でした。それは安東の街で一年数カ月、敗戦国民が祖国に帰る日を夢見ながら、お互いに団結して相互扶助的にボランティア活動をした父たち大人の世界を、少年の目から見たストーリーでした。私は小学校三年生から五年生にかけての年代でしたので、もちろんひもじいとか苦しいということはありません。そういう苦しい思い出よりも、好奇心に満ちていた自分の幼い目に映り体験した、物珍しいことしか記憶に残っていません。アドベンチャラスな少年時代の記憶しか残らないものです。ですから苦しかつ

たけれども、まるでトムソーヤかハックルベリーフィンのような気持ちで当時のことを思い出しながら、私はそのノンフィクションを書きました。

この本では安東での生活体験が主要部分を占めました。それ以前満蒙地帯の興安街における体験も盛り込みたいと思っていました。しかし当時中国はその地域に外国人の立ち入りを許可していません。取材できず、国境の街での生活体験が主になり、モンゴル地域の話は、本の中の一、二章しかページを割くことができませんでした。その話は仲間たちとモンゴルの草原で羊やラクダを追いかけてたり、ジンギスカンごっこをして遊んだというような、どちらかといえばのどかな牧歌的な記憶、そういうストーリーです。

しかし取材・執筆を進めている間に、私たちが住んでいた興安街の近郊で、異常な事件が起きたという情報がだんだん分かってきました。その街には三千人の日本人が住んでいましたが、ソ連軍が攻めてきたときに、二手に分かれて脱出しました。そのうち街の東半分に住んでいた千五百人が、隣街の「葛根廟」というラマ教寺院の裏手まで逃れてきたときに、突然山腹の陰からソ連軍の十五台の戦車と数十台の装甲車が丘の中腹から、まるで待っていましたかのようにヌツと姿を現し、長い行列をつくつ

て避難する日本人を目がけて機関銃、臼砲を乱射し、たった四十五分間で千五百人のうち八〇%の人はその草原で戦車のキヤタピラに踏みつぶされ、虐殺されました。またそこから逃れ得ぬと悟った人たちは、それぞれ身を寄せてダイナマイトで自爆したり、お互いに殺し合っ

て集団自殺したという事実が判明してきました。この事件は今では「葛根廟事件」として知られています。

葛根廟といいますが別に葛の根が自生しているという意味ではなくて、「グゲンミャオ」という中国語の発音を漢字で充てただけに過ぎないんです。活仏（グゲン）の寺という意味で、生き仏が代々おられるということです。

実は殺された千数百名のうちに、私の小学校のクラスメートの大部分が含まれていました。私が行っていたのは僻地の学校でしたので、全校で二百数十名、一学年に一クラスで、そのクラスには三十名ぐらいいしかおりません。ほとんどが街の東半分に住んでいたのです、その避難集団に入っていたのです。私も街の東半分に住んでいたのです、本来ならば犠牲者の仲間に入っていたはずです。しかし先ほどいきましたように、父の学校の家族の避難団というのが急遽結成されましたので、その中に混じって、街を脱出する最後の貨物列車に乗りこみ私たちは逃れてきたわけです。私たちが非常にラッキーだっ

たということを知ったのは、長じてからその本を書くために現地を取材してからのことでした。

よくよく考えてみますと、私は本当に運のいい人間だったようです。クラス三十名のうち日本に生きて帰れたのは私を含めて三人ぐらいしかいません。ほかの大部分はその草原で虐殺されました。傷ついたら何でも何とか逃れて隣の街までトボトボと歩いて、そこで保護してもらって一、二年経って日本に引き揚げてきた学友も中には二、三人います。残留孤児になった人もいます。現地の中国人の人に拾われて、ここで育てられて中国人になつてしまった人もいます。

その後、中国に残つたうちの二人が肉親探しに日本に帰ってきたときに、私は代々木のオリピック青少年センターに行き、クラスメートだということを確認しました。

事ほどさように、殺された人、傷ついてようやく帰ってきた人、残留孤児になった人、三十人のクラスメートの運命はさまざまですが、生きて無事に帰ってこれて、しかも日本に帰っても戦争で家が焼かれたわけでもなく、ほかの子と同じようにスクスクと育ち、戦後、経済大国といわれる日本の物質文明の、飽食の時代の果実を味わったのは、恐らく私も含めて一、二人しかいないでしょう。そういうところから私は

何となく後ろめたさを感じて、ますますその事件の探究に乗り出したわけです。

厳しい時代に同じ仲間として生きていながら、満八歳、九歳で草原の中に命を落とした学友たちを弔うと共に、なぜそういう悲劇が起こったか、どういう時代背景に日本はあつたのだろうかということを調べてみたい、単に自分のプライベートな記録を書くだけで満足しているのか、もっと新聞記者として将来に残す「語り部」としての仕事があるのではないかと強く思うようになってきました。

思えば昭和元年から敗戦に至る昭和二十年までの戦前の時代は、日本と中国との戦争の歴史ではないのか。例えば、昭和三年に奉天という都市の郊外で列車が爆破され、張作霖という満州地域を支配していた将軍が爆殺された。その犯人は日本の特務機関の参謀だった人とすぐ分かりました。それから三年しか経たない昭和六年に、奉天の鉄道の分岐点で同じような事件が起こった。それをきっかけとして日本から駐留していた関東軍が、中国軍のゲリラ隊が戦争を仕掛けてきたと称して、中国軍に対して攻撃を開始し、戦火が開かれた。これが昭和六年の九月十八日に起こった満州事変の発端です。柳条湖というところで行ったので、柳条湖事件とも呼ばれますが、中国人はそれを「チユ、イー、パー（九一八）」といつて日本と中国が

不幸な関係に陥った記念の事件である。と今に至るまで伝えていきます。

昭和三年に張作霖爆殺事件があり、昭和六年に満州事変が起き、私が生まれた昭和十二年に盧溝橋という北京郊外の橋の近くで日本軍と中国軍が戦争を始めた。それをきっかけに日本軍は満州に進出しただけでなく、今度は中国全土を制覇するため戦線を拡大していきました。昭和三年、昭和六年、昭和十二年と、日本と中国の戦争の歴史を、一つひとつ繋いでいくと、不幸な歴史の足跡をたどることができま

す。私はそういつたことを調べるためにいろいろな本を読みましたし、いろいろな人にインタビューしました。けれども、いま一つピンときません。そうこうしているときに、満映のトップスターだった李香蘭という女優が、自分の伝記を書きたいので協力してくれないかということ

で私のところに来ました。昔、満州映画協会、俗に「満映」と称した文化機関がありました。満州という国は、日本が侵略したといわれるけれども、実は五つの民族が仲良く一つの国を協力して作るうとしていたのである、と中国の人たちにPRするためにつくった映画会社のことです。その満映のトップスターだった李香蘭という人は、中国生まれの中国人で日本語も話せる女優だといわれて

いました。しかし真実は、日本軍が文化政策を中国人に植えつけるために操り人形として使った女優で、山口淑子という日本人だったので

す。季香蘭といっても皆さんにはピンとこないかもしれませんけれども、今でいえばどんなアイドルよりも超有名だった女優、歌手です。単に日本国内で有名だっただけでなく、アジアの中国語圏の国では絶大な人気を誇った女優でした。

その人は、映画を通じて日本軍のための宣伝活動をしたということで、敗戦の年に逮捕され、軍事裁判にかけられました。祖国を裏切った罪という罪名です。それは中国人に言わせれば、中国人でありながら日本人の手先になって中国人を侮辱したという罪です。その裁判は昭和二十一年、彼女が最後にいた上海で開かれました。しかし、彼女は無罪になります。なぜならば彼女は日本人だったということが立証されたからです。身分証明、アイデンティティが日本人だということが立証されたので、祖国を裏切った罪という中国人の告発には該当しないということが無罪になりました。しかし、中国人を侮辱したから即刻退去せよということで、日本に送還されてしまいます。

帰国後、東宝映画の女優として、本名の山口淑子で出演して、日本でも絶大な人気を博しま

した。かつ戦前から国際的な女優の素質がありましたから、日本人の女優としては戦後初めてハリウッドの映画に出演し、ブロードウェイの舞台に立ち、日本の女性として初めてのミュージカルスターになったという人です。

彼女自身は自分が中国で文化政策に使われたということについてあまり問題意識がなく、つまりイノセント（無垢）だったわけですから、でも、パペット（操り人形）として使われてしまったということの反省から、自分はやはりアジアと日本の平和のために尽くそうと考え、その後ジャーナリストとして活躍し、テレビのニュースキャスターをつとめ、その後政治家になり、日中国交正常化やアジアの人との交流に尽くして、戦後を送ってきた人です。そういう人から伝記を書いてくれと言われて、では一緒に書きましようということで書いたのが『李香蘭私の半生』（新潮社）という本です。

このストーリーは、その後テレビのドラマになり沢口靖子さんが主演したり、劇団四季の手でミュージカルになり、毎年上演されているので知っている方も少なくないでしょう。彼女のライフストーリーを追いかけることにより、私は新聞記者として戦前の昭和はどんな時代だったかということ、を、ようやくつかむことができました。

彼女は、満州事変が起きたとき、中学生で

ようどその場所の近くに住んでいました。また、盧溝橋事件が北京郊外で起こったところに、北京で中国人であると偽って、中国人だけの女学校、ミッシヨンスクールに通っていました。日本と中国が盧溝橋事件で戦争を始めますと、その女子学生たちは他の大学の学生と一緒になって、反日、抗日のデモを毎日繰り広げたんですけれども、彼女も一緒になってデモに参加せざるを得ませんでした。その理由は、日本人であることが分かれれば、彼女は学友たちを裏切ったことになるからです。そのときから彼女は、祖国と母国の間に挟まれたアイデンティティの悩みを抱くようになるわけです。自分とは一体何者なのであるかという悩みです。

そういう彼女のライフストーリーを追いかけているうちに、私はアイデンティティという問題は、彼女個人の問題だけではなく、日本の国家としての問題であるとも思い至りました。個人のアイデンティティとは「私とはなんだろう?」という素朴な疑問から始まりますが、これを国家に置き換えた場合、「日本は世界の中でどうあるべきか」という命題につきあたるのではないかと思うようになりました。

ところで話は飛びますが、私が新聞記者になったところは、日本は高度成長の時代といわれ始めたころです。私が新聞記者になったのは昭和

三十七年ですが、昭和三十年代の後半から日本は、敗戦の巷の灰塵から立ち上がり見事に復興を遂げたうえ、高度経済成長のエンジンを吹かし始めました。時は池田内閣、大蔵大臣が田中角栄という人でして、錬金術師とも言われました。池田首相は、下村治というエコノミストの所得倍増計画を引っ提げて、田中蔵相の財政政策の手で日本の高度成長をスタートさせました。

そのころ、日本はIMF（国際通貨基金）の中でも、もう敗戦国ではないという扱いを受けて、アメリカ、イギリス、フランスなどと対等に為替の取引をしようということになりました。IMFの第八条（原則として国際収支上の理由からは経常的取引については為替管理を行わない）の適用を受ける国、いわゆる「IMF八条国」に移行しました。同時に、世界の先進経済国だけでつくっているOECD（経済協力開発機構）という条約に加盟したのも同じころです。さらに昭和三十九年、東京でオリンピック大会が開かれました。つまり、そのころから日本は国際的にも認められ始めたわけです。そして専らアメリカのバックアップで、経済の復興から高度成長を見事になし遂げ、国際社会にデビューします。

昭和四十二年、私はカナダの首府オタワの特派員として派遣されました。たった一年間だけ

ですけれども、非常にいい経験をしたと思います。というのは日本は高度成長経済をひた走りに走っている。私は経済記者として、そのひた走りに走る経済の横でマラソンの伴走者のように一緒に走りながら取材することができたからです。

カナダという日本には直接関係ない国に渡り、ちよつと一服して海の向こうから日本を眺めますと、世界地図の中で日本だけが異様な姿として映ってくるのです。瞬く間に車の生産台数やGNP（国民総生産）が増大し、洪水のように輸出品を送り出したために、特にアメリカとの関係が少しくおかしくなってきた。一方で日本という自分の祖国の状況を眺めながら、他方で隣のアメリカを見てみると、日本は高度成長で走るのはいのだけれども、おかしな走り方をしているのではないかと思うようになりました。

翌年、私はアメリカの首都ワシントンの特派員として転勤を命ぜられました。ワシントン特派員時代の四年間で、私の抱いていた心配はやはり心配にとどまらず、果たして、日本とアメリカの間で軍事力による戦争ではなく経済戦争が始まったわけです。

一九六七年、私がワシントンに赴任したときに繊維戦争が起きました。続いてテレビ、鉄鋼、ボールベアリングの戦争が起きました。

繊維品の戦争はアジアに飛び火しました。そしてその戦争の結末は一九七一年（昭和四十六年）の八月十五日のニクソンショックという大事件でした。

八月十五日というのは、日本が昭和二十年に戦争に負けた日と偶然一致するタイミングです。ニクソン大統領は、日本からの輸出品に対して十五%の課徴金をかけるという政策を採りました。それから一ドル＝三百六十円と設定されていた為替レートをチャラにする。つまり、もう為替レートは止めて、それまでの固定平価制度をフロート制、つまり変動相場制にするという措置を打ち出しました。それは金とドルとの交換性を絶ったわけです。「これは一体何なのだろうか」と考えました。ひよっとして第二の日米戦争かなと思いましたが、それ以来、通貨ではフロート制が採用され、現在に至っています。

さて、私の中国体験と、アメリカでの取材体験を合わせて考えて、そこで初めて下の表に行き着くわけです。

考えてみると、一八六八年、ペリリが浦賀沖に四隻の軍艦を率いてやって来て、門戸開放を迫り、結局明治維新になった。そこから現在まで約百三十年間が経過している。日本の歴史は、歴代の天皇家や、奈良、平安から数えられて戦国時代、江戸時代を経て、それで明治、大正、

昭和と、長い文化伝統を誇っているといえます。そのこと自体には間違いないのですが、近代国家としての日本の歴史はたった百三十年しかありません。

高度成長時代には、イギリスをイギリス病、イタリアをイタリア病、ヨーロッパ諸国をヨーロッパ病だと、自分がどういう状況に置かれているということには気づかぬまま、他国の経済が疲弊したのをあざ笑う、または下に見るというようなことを日本はしていたわけです。

そんな風がいい気になってやってきた日本経済は、ここにきて経済のあり方自体が厳しく問われることになってきていることはご承知の通りです。私が振り返ってみますと、近代国家になってからの日本は、大体四十年という期間を一括りにして、社会システムが変わってきたのではなからうか。機械や設備、工場設備に耐用年数があると同じように、または人間に寿命があると同じように、歴史や社会システムにも耐用年数があるのではないか。そこで日本の耐用年数は何年だろうなと思って考えてみますと、四十年ぐらいかなというふうに思われて仕方ありません。

表に書いておきましたけれども、ペリリが来たのが一八六八年。次の四十年というと、大体日露戦争が起こった年。その次の四十年という

日本の耐用年数（40年）

	←40年→	←40年→	←40年→	←40年→	←40年→	
期間	1868～ (ペリリ来航)	1904～ (日露戦争)	1945～ (第二次大戦)	1985～ (プラザ合意)	2025～	2065
圧力	外圧	外圧	外圧	外圧	内圧	
国力	軍事 大国 (富国・殖産)		経済 大国 (産業・金融)		文化 大国？ (福祉・文化)	
牽引力	国家 部門		企業 部門		個人 部門？	

と一九四五年、日本が戦争に負けた年。その次の四十年というと大事件はプラザ合意。プラザ合意のところに東西冷戦構造の解消と書き換えてもいいかもしれません。つまり、ソ連崩壊の兆しが見えてきた年ともいえます。

これは牽強附会の感もなきにしもあらずですが、日本の社会システムは大体四十年おきに変わってきているということが言えるのではないのでしょうか。「えっ日露戦争、日露戦争は勝ったじゃないか」とおっしゃるかもしれませんが。日露戦争は一応勝ったことになっていますが、実は負けるはずの戦争だったのです。乃木大将が二〇三高地で勝ったとか、バルチック艦隊が日本海海戦で勝ったとかといいますが、これも、実は当時のロシア自体がもう革命前夜で王朝が危殆に瀕していて、内部から崩壊したのであり、日本はようやくアメリカの助けで戦争をやめることができたのであって、勝ったという形になってはいますが、大きくエポックを画する時期であったことは間違いありません。

現在まで見てきますと、耐用年数である四十年が切れて次のシステムをどうしようかというときに決まって、新しい設計図、青写真は外から与えられてきたわけです。第二次大戦で日本が負けたときは、アメリカを中心としたGHQから、日本に対して例えば教育制度はこう変えなさい、農地解放をしなさい、財閥は解体し

なさい、社会システムこうしなさい、というふうにグラウンドデザインを与えられました。

あれやこれやを見てもみずと、日本は今までに外からの力、つまり外圧でもって社会システムの耐用年数が切れたときに、新しい設計図を外から与えられて、その目標を目指してひた走りに走って達成する。次に耐用年数の期限が切れてどうしようかなと思っていると、また外から設計図を渡される。それをひた走りに追求する。そういうことで生きてきたわけです。先ほどの表に「圧力」と書いて外圧、外圧、外圧と書いてあるのはそういうことです。

特に近代国家としての前半は、とにかく富国強兵、殖産振興という合言葉で軍事力を増強し、ヨーロッパ、アメリカからもさまざまな制度を取り入れて、それで急いで近代国家の体裁を整えるということで終始してきたわけです。特に軍事力は突出してまして、それで一応日露戦争に勝ったということになります。結局そのまま第二次大戦の敗戦に突入する。当時のワシントン条約やロンドン軍縮条約では、アメリカの軍艦の数と日本の数は七対三などといわれるように、日本は軍事力では世界の大国を自認するようになったわけです。

一九四五年に敗戦を迎えて、「えっ、もう戦争しなきゃいけないの」という新しい世の中になり、それならば軍備さえ持たなければいいだろ

うと考え、かわりに持ったのがマネーです。今度は経済という力だけを借りて成長していく。そして世界市場にむやみに経済進出して嫌われる、という経済大国の道を選んでしまいました。

私の個人的見解から言うと、防衛力、つまり軍事力は必要、経済はもちろん必要です。なしる日本は島国ですから経済でもって生きていくしか手段がありませんから。なのですが、軍事力や経済力など一つの手段に特化しすぎて、それも他国の迷惑を考えず、それだけをひたすら追いかけるということから失敗を繰り返しているのではないのでしょうか。経済大国として〈大国〉を目指したことが、軍事大国として〈大国〉を目指したということに、そもそも間違いがあったのではないか。一つの手段だけに集中して国家運営してきたということに間違いがあったのではないか。

それやこれやを考察し、もう一つ、その時代、時代の牽引力になったのは何かということを表の一番下の欄に書いておきました。前半は〈国家部門〉だけが中心になった。敗戦後は軍事力は持たなくていい、経済を中心をやったときには〈企業部門〉だけが中心になったのではないか。実はその時「個人」という〈個人部門〉を忘れていたのではないか。それが今、プラザ合意後の四十年間の試練の時期にある、

現在我々が逢着している時代です。

つまり、もう何も外からグラウンドデザインは渡されぬ。近代国家としての日本はここで初めて自分たちで考え、自分たちで自分たちの国家の行く末というのを見きわめなければならぬ。しかも、国のためとか、企業のためというのではなくて、あくまでも個人ということを中心と考えた考え方をしなければならぬということを追われているわけです。

欧米諸国は、市民革命やさまざまな革命を経て専制国家を民衆・市民が倒して、いわゆる民主主義の国家を経験的に営々と築き上げてきました。日本だつて明治維新で徳川幕府を倒したとはいいますが、あれは各藩が天皇を担ぎだして、各藩の下級武士等が中心になって国家体制を整え、欧米に追いつけ、追い越せというふうに急いで国家運営をしてきたものであつて、決して市民の中から出てきたものではありません。欧米が個人からコミュニティ、コミュニティから国家というふうには、まず個人をベースにして国家というものが広がってきたのに対して、日本は最初に国家ありき、企業ありき、一番後というか、むしろないがしろにされてきたのが個人。それがようやくここにきて、個人というものの重要性に気づいたわけです。例えば、経済の問題でいえば税、とくに消費税です。それまで「税金は嫌だなあ、しかし仕

方がない」という関心しか持たなかつたのが、ようやくおれたちの税金をなぜこれだけ払わなければならないのか、払われた税金はどういうふうに使われているのか？ ということを最近考えるようになってきました。最近といっても、ほんの十五年ぐらい前からようやくタックスペイヤー（納税者意識）、つまり市民意識が芽生えてきたのです。

経済だけがむしやりにやればいいのか。失敗だつたということは、皆さんご存じの通りです。失敗だつたからこそ、大きな銀行がいくつも潰れ、大きな証券会社が自己破産するという事件が起こつたわけです。つまり日本は現在、社会システム全体、その中の経済システム、金融システムはもろろのこと、日本のシステム全体がまた耐用年数が切れて、次のプランをどうしようかという、ちょうどその節目に差しかかつてきているわけです。

初めて自分たちの頭で考えなければいけない。軍事大国は失敗だつた。経済大国も失敗だつた。それでは次はどういう国家にすればいいか。それが松本健一さんによつて、『第二の敗戦』とか『第三の開国』などと命名されているゆえんです。この表に私は「文化大国？」と書きましたけれども、後ろにクエスチョンマークが付いているように、文化だけ取り出しても駄目だということです。防衛も経済もしっかりし

ていなければいけません。しかも大国になる必要もありません。

日本人という民族は、自分たちの分相応のスケール、ないしは力、つまり自分たちの幸福のためにはどのような国家であるべきか、品格ある国家をいかに目指すべきか、ということを考えればいいのであつて、ビッグである必要はさらさないわけです。防衛力、経済力、文化、福祉、教育、あらゆる分野が同じようなバランスでうまく成り立っていく国、そういう国が望ましい。

よくプロ野球のチームの実力を測るのに、六角形のクモの巣のようなグラフで測定することがありますね。投手力は抜群だが、打力はこのくらいだ、キャッチャーは良くない等、実力をクモの巣状のグラフで表現することがありますけれども、これは野球のチームの実力だけではなく、ほかのことにもよく応用されます。やはり均衡の取れた正六角形の姿で、内容の伴つた国力でなければ真の意味での幸福な国家にはなり得ないと思います。

そこで重要なのは、今どういう国家プランを立てるかということです。ちょうど今二十一世紀を迎えようとしている時期です。発想の転換が必要です。その発想の転換は個人から生まれなければなりません。過去の既成概念から離れて、大胆な改革を行う必要があります。政府も

遅ればせながらいろいろな改革に着手してきつつあります。それぞれの政策は後手に廻っている感もありますが、大胆な改革をしようとしています。金融システムもそうです。今まで、日本銀行の正副総裁というのは、プロパーからの昇格以外には大蔵次官経験者や民間銀行の頭取からしか登用されてこなかった。それが従来の出身母体である大蔵省、日銀、金融界自体に大不祥事件があつて、首脳も交代させなければいけないということになったわけです。

そういったドタバタ騒ぎの中に、私みたいな素人が日本銀行の副総裁に起用されたのですが、私の友人は「あいつが日本銀行の副総裁になるなら世も末だ」というふうに言いました。私は「はい、さようです。皆さんご承知の通り、今日本は世も末です。この末世的な状況になった社会システムを、むしろ世の始まりとして新しい二十一世紀を展望するためには、私を副総裁に起用するような、そういう発想の転換が必要なんじゃないですか」と答えました。実は経済記者時代に、日本銀行をどう改革するかということで、日銀法改正を審議する金融制度調査会という政府の審議会の委員をしていました。そのとき私は六十歳で会社も定年です。うちの近くの心身障害者のボランティア活動や満州の残留孤児引き揚げのお手伝いもしているのです。リタイア後はボランティア活動に

専心しようと思っていました。金融制度調査会の日銀法改正問題の審議にあたって、お国のための最後のご奉公だと思つて、ズバズバ意見を言い、ああせい、こうせいというふうに注文を付けました。

ところで日銀法（日本銀行法）というのは昭和十七年にできた法律です。昭和十六年に太平洋戦争が始まつて、昭和十七年にできた法律というのは戦時立法で大分古い法律です。このように不祥事件を起こした日本の金融システムを変えようためには、日銀ももう新しく生まれ変わらなければいけない。新しい独立性と透明性を確保した姿に改めなければいけないということで、日銀法は改正されたわけですが、まさか自分が改正を手がけた日本銀行に来るとは思つていませんでした。日本銀行の給料は高いから下げるべきだと主張して、その結果、役員給与が三十三%下がりました。私が来るならあんなに下げるなんて言うべきじゃなかったと思つているんですが（笑）。それは冗談ですけども。

いずれにしても「おまえはあれだけ日本銀行はこういうふう生まれ変わらなければいけないと散々注文を付けたではないか、ここに来てそのおとしませをつけてもらおう」ということで、日本銀行の副総裁になれと言われたわけです。もちろん私は逃げ回りましたし、家族は

泣いて反対しましたが、よくよく考えてみますと、法改正のお手伝いをしたのが最後のご奉公なら、新しい時代の社会システムづくり、新しい金融システムづくりに、私のような素人が加わつて一般社会の常識と良識の風を吹き込むことも必要なことではなからうか、それが私の新しいボランティア活動ではないのか、と自分なりに道を見出した思いで日本銀行に入った次第です。

満州の話から日銀の話まで、いろいろな話をさせていただきましたけれども、大事なことは日本の耐用年数が今切れかかっているということ。これまでのように外庄により何か新しいアイデアをもらえないということ。これからは自分たちで考えなければいけないということ。自分たちで考えるには新しい若い力が必要だということ。若い力が必要だということで、本日、私は和敬塾の卒業式ともいふべきこの式典で講演をさせていただいた理由は、若い皆さんにこれからの日本をよろしく願ひしますと願ひするためです。

どうも長い間、ご清聴ありがとうございました。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。